



令和元年度

学校評価報告書

帝塚山小学校



学校法人帝塚山学園

令和元年度学校評価について

帝塚山小学校は、令和元年度の教育活動及びその他の学校運営の状況について、学校評価を実施しました。

学校評価は、本校児童とその保護者を対象とした各アンケート結果、育友会等との懇談会で寄せられた御意見等を活用の上自ら評価を行い、さらにその結果について学校関係者による評価を行いました。

このたびの結果を踏まえ、更なる教育水準の向上を目指して、教育活動及び学校運営の改善工夫に組織をあげて継続的に取り組んでいく所存です。

帝塚山小学校
校長 野村 至弘

令和元年度 学校評価

1. 総括

学校名	帝塚山小学校	
建学の精神	「社会に有為な人材を育成する」	
本校の重点目標 (教育目標)	[人間力の基礎づくりと21世紀型スキルの育成] “「子どもの根っこを鍛える」教育をめざす”	
前年度の成果と課題	[成果] 21世紀型スキルの育成を目指した特色ある教育として、プログラミング及びロボット教育を位置づけることができた。また、英語集中プログラムを実施し、国内留学の定着を図った。さらに、広報活動ではホームページの充実を図るとともに、体験入学や説明会で教育の独自性をアピールし、出願者を増加させることができた。 [課題] 時代の流れを読み誤らず、また保護者の期待に応えるべく、より具体的定量的な教育目標、重点目標を設定し、職員の共通理解を図りたい。	
本年度の重点目標	具体的目標	総合評価
1. 「根っこを鍛える」教育目標の具現化	① 教育目標の徹底 ② 「考える子ども」の育成 ③ 「心を磨き共感力を高める」活動の充実 ④ 「本物にふれ可能性をひろげる」実践の推進	<p style="text-align: center;">A</p> <p>今年度は、夏の教員不祥事、年度末の新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休校という異例の事態が生じたが、教職員が一丸となって、迅速かつ適切に児童及び保護者に対応を行った年度であった。そのような状況下であっても、教職員の尽力により、教育目標（「根っこを鍛える」）と教育の3つの柱（「考える子ども」の育成、「心を磨き共感力を高める」活動の充実、「本物にふれ可能性をひろげる」実践の推進）を大切に、本校教育の特長を各活動を通じて鮮明にすることができた。</p> <p>具体的には、情報教育と国際理解教育において先進的な取り組みを行い、積極的に発信することができた。</p> <p>また、学園各校園との教育連携の輪を拡げ、総合学園としての優位性を明確にすることができた。</p> <p>「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、大学、企業、省庁などと連携して外部講師講演会、外部講師出張授業を積極的に実施して児童の視野を広げることができた。</p> <p>児童募集活動については、外部からの出願者が49名、内部志願者35名、合計84名となり、近隣競合校が軒並み定員割れの中、人数は確保したものの、昨年度に比べて減少したことは反省材料である。</p> <p>併設の帝塚山幼稚園からの内部進学率は目標の80%を上回った。帝塚山中学校への進学率は目標の60%に届かなかったが、昨年度より回復することができた。さらに内部進学推薦制度の充実を図る必要がある。</p>
2. 特色ある教育の推進拡充	① 情報教育の推進 ② 国際理解教育の充実 ③ 「社会に開かれた教育課程」の実現 ④ 学園各校園との連携強化	
3. 教員の意識改革・行動改革推進	① 学校リスクの対策強化 ② 研究・研修の推進 ③ 財政健全化策の強化 ④ 学校評価の実質化 ⑤ 教員評価の実施推進	
4. 児童募集活動の強化	① 広報活動の組織的展開 ② 募集行事の充実 ③ 教育内容の独自性発信	

2.-① 自己評価（教育活動に関するもの）

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
教育目標	教育目標の教職員における共有化	年度初め及び各学期に、教育目標を説明し、全教職員に共有させる。	A	A	各学期末に研修会を開き、教育界の動向を説明し、本校の教育目標の位置づけについて教職員の周知を図った。さらに毎月、部長を招集し「経営戦略会議」を開催して教育目標の具現化について検討した。	新学習指導要領に即した新しいカリキュラムを作成したので、これの検証を行う。
	教育目標に対する保護者の理解促進	学校教育目標を保護者に説明し、理解していただく。（3回実施）	A		4月の全学年保護者会及び育友会総会にて、改善点も含め、目標と具体的方策について説明した。また、「校長室だより」、「学校だより」及び、各学期での学級懇談で繰り返し教育目標を説明し、理解を得た。	「学校だより」、「校長室だより」及びホームページでもさらに積極的に発信していく。
教科指導	アクティブ・ラーニングの推進	「主体的・対話的・学習深化」を意識した授業に関する研修会を実施し、実践する。（3回実施）	A	A	新学習指導要領の研修を行った。また、「主体的・対話的・学習深化」を意識した模擬授業を年間3回実施し、事前研修、事後研修で検討した。大学とも連携し、授業の研修、協議を通じて、よりよい授業作りに取り組んだ。	本校としてのアクティブ・ラーニングの在り方と新学習指導要領に即した新しいカリキュラムの検証と検討を行う。
	課題解決学習の推進	自らの問いを大切にしたい主体的学習活動を全教科で推進した。	A		課題解決学習を意識した学習を進め、実体験に即した授業の実践を図った。	「ESD教育」を本校の課題解決学習の柱として位置づけるための検討を行う。
	学習内容の精選	新学習指導要領での改訂内容について周知する。	A		学年はじめに新学習指導要領での改訂内容について教科主任より職員に周知を図った。また、改訂内容と見合わせた本校の新カリキュラム案を作り、教科ごとに検討を深めた。	新学習指導要領に即した新しいカリキュラムを作成したので、これの検証を行う。
	指導方法の工夫改善	全教員が、ICTの活用や教材を工夫し、子どもの意欲を高める授業に心がけている。	A		各教員がタブレット端末・教材提示装置、インターネット教材などICTを活用した指導の工夫を行い、日常の授業の中で、適切にICTを活用することができた。	タブレット端末をさらに有効活用した授業の工夫をする。
	「読む」「書く」活動重視	授業で「読む」、「書く」活動を積極的に取り入れる。	A		国語科における「音読」の重視、また読み聞かせを積極的に採り入れ、学習の推進を図った。また、「れんらくちょう」を中心に「書く」指導にも重点をおいてきた。	「自主学习ノート」をさらに全児童に定着させ、調べて読み、理解したことを書き綴る学習を推進する。
特別活動・道徳教育・人権教育	「道徳」の充実	本校独自のカリキュラムのもとでの授業を実施し、その内容について学期末に授業研究部に報告する。	A	B	各クラスで本校カリキュラムを実践して、授業研究部でその授業内容を今後共有できるように集約した。また、評価の方法について検討した。	今年度の実践記録を参考に、本校の道徳カリキュラムをさらに充実させる。
	人権教育の充実	人権委員会主導のもと、道徳教育との関連を考慮した取り組みを進める。	A		人権委員会が中心になり、人権集会に変わる内容の道徳授業を実践し、内容を「学級通信」、「学校だより」で保護者に伝えた。	児童の生活実態を把握し、さらに多様で現実的な人権教育の推進を工夫する。
	学校行事の活性化	各行事のあり方について検討し、次年度に向けて効率化、合理化を図る。	A		各行事終了後に、職員が問題点、改善点を出しあい、経営戦略会議で、年間行事の吟味検討を行った。	行事の精選を図る。
	児童会活動の活性化	児童が主体的に計画し、活動できる環境を整備する。	A		全校遠足企画委員・えがお安全委員・つながり委員・運動会委員・集い委員・6年生を送る会企画委員・図書委員を設け、主体的な活動を目指した。委員が活動することにより、より身近な内容として捉えさせた。	今回の新しい委員会組織を検証し、さらに主体的な委員会活動を目指す。
	特別活動の充実	全校集会（月1回）、講演会（年間6回）、掃除（毎日）など「心を磨く」活動を推進する。	A		全校集会を月1回、各学年での講演会に替えて出張授業を年間3回、週1回の掃除ボランティアを継続実施した。	「社会に開かれた教育課程」の実現を目指す特別活動を継続する。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
特別活動・道徳教育・人権教育	体験合宿の充実	各学年の合宿における体験活動を、独自性と系統性を重視して実施する。	B	重要な夏期合宿が実施できなかったが、それに変わるものとして、秋の遠足の内容を工夫し、合宿での学習内容を織り込んだ。	教育方針の1つの柱である体験合宿ができなかった。次年度はさらに内容を精選して実施したい。
	体験学習の推進	授業での探求活動において、現場主義、実践主義を重視する。	A	5年生ダイハツ出張授業、6年生琵琶湖博物館実習、4～6年生での大和文華館実習の実施を今年も実施し、大きな成果があった。	今後、さらに外部講師出張授業による体験学習を充実していく。
	クラブ活動の活性化	より高度な目標のもと、主体的で意欲的な活動を推進する一方、児童と教員双方の負担とならないよう課外活動の日程や時間を考慮する。	B	6年生の活動のまとめが十分ではなかった。さらに課外活動については、保護者の間で以前ほどの価値観を見いださない風潮がでてきた。	教員の働き方改革、児童の加重負担などに十分な配慮が必要である。活動内容について再検討が必要。
	自主参加体験活動の推進	土曜教室や長期休業中の体験活動などを、積極的に計画的にする。	A	自主参加体験活動として、和太鼓、野菜栽培、ロボット教室、大学によるロボット体験、雪山登山などを計画、実施した。児童の参加意欲が高く、本校独自の本物に触れる体験として位置づけることができた。	今後、さらに教員の個性と工夫を生かした多彩なプログラムを準備していく。
ICT教育	授業におけるICT活用	電子黒板、プロジェクター、書画カメラ、タブレット端末等を効果的に授業で利用する。(授業実施内容)	A	情報機器を活用しての教材づくりを進め、授業実践に活用した。	児童用タブレット端末の効果的な活用をさらに推進していくために、二人一台確保したが、今後一人一台を目指す。
	ICT教育の推進	タブレット端末やオンライン学習ソフトなどを活用した実践を推進する。	A	各授業で積極的にICTを活用し、保護者参観授業で展開した。特に英語科では、最先端のオンライン教材「hodo English」、「schlastic」を導入、授業でも活用した。	CA Tech Kidsプログラムを今後いかに活用するのか検討する。
	「情報」授業の充実	先進的な授業内容が展開できるようカリキュラムを作成する。(週1回実施)	A	情報科担当教員が年間カリキュラムを作成し、プログラミングの位置づけも含め、全職員で共有した。ネット使用のマナーについて、最新情報を含めて研修を行なった。	児童用タブレット端末の活用について、さらに検討する。
	プログラミング教育の推進	2020年の必修化に向けて、先進的な活動を展開する。(4年生出張プログラミング講座の実施)	A	4年生出張プログラミング講座など、年間を通じて9回のオンラインプログラミング学習を実施した。また、長期休業期間を活用し、自習できる体制を作った。	ボーカロイドの全学年での活用を推進する。CA Tech Kidsプログラムを今後いかに活用するのか検討する。
	ロボット教育の推進	プログラミング教育の発展として、先進的な活動を展開する。(5年生1回、6年生1回)	A	5年生、6年生全員を対象に、企業と連携して先進的なロボット体験授業をそれぞれ1回実施した。また帝塚山大学現代生活学部こども学科との連携による「入門ロボット教室」を4年生希望者を対象に実施した。	企業との連携により、より高度な内容を推進するとともに、ロボット教室の充実を目指す。
国際理解教育	「英語」授業の充実	2020年の「教科化」に向けて、先進的な活動を展開する。	A	文部科学省が目指す英語4技能のバランスを考えた学習を本校独自のカリキュラムで実施した。英語発表会を12月に実施し、児童の表現活動を保護者に十分に伝えることができた。また、英検とともにTOEFL Primaryに取り組んだ。また、スピーキングテストも実施した。	外部団体開催の英語コンテストへの積極的な参加を継続する。
	「国内留学」の推進	「話す」「聴く」力の向上に向けて、引き続き、3年・4年・5年の3カ年で実施する。	A	時間を有効に使うために、1学年につき一日終日でプログラムを作成し、学年ごとの発展段階を明確にした。児童から高い評価を得た。来年度は活動をより充実するために、会場を近場に変更した。	新しい会場での有効実施を推進する。
	海外姉妹校との交流	各学年の英語科で作成した作品を、海外姉妹校に発信する。	B	作品交流のほか、フィンランドのMakelanmaan Koulu校とスカイプを使った交流をおこなった。	オーストラリアキャンベラの姉妹校セントモニカ小学校への留学を検討する。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
教員評価	教員自己評価表の作成	各自のその年度での努力目標をはっきりさせ、学期ごとに検討、改善を加える。	B	B	他校との教科ごと交流などがあったが、さらなる交流を通じて、自己研鑽を積むことが必要。	自己研鑽、自己啓発のための評価であることを意識し、具体的な到達目標を設定する。
	自己評価の目的の徹底	教員自己評価によって、各自が自らの指導力向上と業務の効率化を意識する。	B		「働き方改革」の視点から、勤務時間、勤務内容の効率化を図る研修を実施した。作業の効率化とともに、教員の意識改革が必要である。	限られた時間の中で、指導力の向上と業務の効率化とのバランスをどう保っていくべきかの検討する。
教育連携・内部進学	幼稚園との連携交流	体験入学や幼小合同行事、小幼交流授業、小学校教員による授業など園児との交流を積極的に図る。	A	B	年長と小学生との交流行事、また、幼稚園に出向いて、読み聞かせなどを行った。内部幼稚園向け入学説明会や体験授業を実施するとともに、英語授業やクラブ訪問など積極的に行った。	小学校教員の出張授業や小学生との交流の場をさらに増やしていく。
	中高との連携交流	教員、生徒間交流を積極的に行うとともに、内部進学率の向上を目指す。	B		5年生、6年生対象の体験授業、4～6年生保護者対象説明会を実施した。教員間・生徒間交流は実現できなかったが、内部進学推薦制度改革において、大きな進展があった。	教員間・生徒間交流を実現することと、新内部進学推薦制度の定着を図る。
	大学との連携交流	食物栄養学科、こども学科、日本文化学科など様々な交流活動を進める。交流件数5件以上を目指す。	A		帝塚山大学現代生活学部食物栄養学科の学生による食育授業を全学級で実施し、また、同学部こども学科による授業研究、ロボット体験授業、など多彩な内容で大学との連携を図った。	授業での児童の学習支援における連携を検討する。
	幼稚園からの内部進学制度の充実	内部進学推薦制度の充実や年長、年中体験授業の推進など、円滑な接続に努める。(内部進学率80%以上)	A		様々な連携行事、交流により、帝塚山小学校を認知していただく機会を増やし、理解は深まっている。(内部進学率81%)	園児、児童間の交流行事をさらに積極的に企画し、内部進学者をさらに確保する。
	中学校への内部進学指導の充実	内部進学推薦制度の充実や6年、5年体験授業の推進など、円滑な接続に努める。(内部進学合格率60%以上)	B		小中連携会議を繰り返し、内部進学推薦制度の改善を図ったが、帝塚山中学校への内部進学率は、昨年度実績を上回ったものの、54%となった。現在も児童保護者の希望と実際の進学実績には乖離がある。	内部進学制度や内部中学について、保護者にさらに周知する必要がある。内部推薦制度を定着させる。

評価は4段階【A：十分である（よくできた）、B：ほぼ十分である（できた）、C：あまり十分でない（あまりできなかった）、D：改善を要する（できなかった）】

2.-② 自己評価（学校経営に関するもの）

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策	
組織運営・安全管理・保健管理	学校安全計画の充実	児童の安全教育の充実を図るため、安全教育に関する講習会を実施。（児童2回、職員2回）	A	児童生活部による校内安全点検を毎月実施した。また、児童対象の生活安全教室、メディアモラル教室、職員対象の水難救助研修、救急研修を実施した。	安全管理は今後、保健体育部の管轄とし、中高との連携を図る。	
	学校保健計画の充実	児童の健康教育の充実を図るため、保健教育に関する職員研修会を行う。（年3回実施）	A	全学年での食育授業、保健集会を実施した。また、5、6年対象の性教育出張授業を実施した。	健康に関する意識を高めるための積極的な啓発活動を今後重視する。	
	学校防災計画の推進	現実的な抜き打ち防災訓練を計画するとともに、防災設備の充実を図る。（年10回実施）	B	今年度は最終的には6回の防災訓練実施となった。天候や中高グランド事情により実施できないことが多かった。	さらに、様々な想定での訓練の実施と児童の意識向上を目指す。	
	保護者との連絡体制の充実	電話や家庭訪問、面談などによる連絡相談と2種類のメールによる連絡体制をとる。	A	電話・メールでの連絡、必要に応じての家庭訪問など、きめ細やかな連絡に注力した。また「学級通信」も積極的に発行した。	文書とメールの双方の特性を考慮して発信方法を今後も使い分ける。	
	学校カウンセリングの充実	保護者対象のカウンセリングを定期的に実施するとともに常駐カウンセラーの設置を目指す。	A	A	不祥事に関係して、カウンセリングの機会が大変増加し、帝塚山大学「心のケアセンター」も小学校の要請に応え、特例制度によるカウンセリングを実施してくださった。	専属カウンセラー対応日程をさらに確保し、カウンセリングのさらなる充実を目指す。
	情報管理の徹底	公文書や個人情報データを適正に保護、管理する。（外部流出ゼロ）	A	重要書類の外部流失がないよう、教員全員に周知徹底を図った。また「あゆみ」のデータ保管も厳正に行った。データ媒体は厳重に管理している。	児童の成績などのデータベース化に加え、来年度は指導要録のデータベース化を進める。	
	施設・設備の安全管理	生活指導部、保健体育部により、施設設備の安全点検を実施する。（年3回実施）	A	夏休み中に施設設備の安全管理、点検を徹底的に行ったほか、毎月末に安全点検を実施し、結果をその都度一括管理した。	安心安全な学校の環境作りを今後も進める。	
	職員のメンタルヘルスの推進	管理職と教職員相互の連絡、報告、相談が円滑に行われ、健全な職場環境を保障する。	A	11月のメンタルヘルス研修会を受け、12月の会議で講義内容を小学校全教員に伝達。小学校として必須である保護者対応におけるアンガーマネジメントについての理解を深めることができた。	学園で実施しているメンタルヘルスチェックの結果をどのように活用するか、検討する。	
	関係機関との連携	学校医や市・県の関係機関との連絡、相談体制を整備する。	A	要保護児童の対応について県・市の子育て相談センターと連絡を密にし、必要な場合はケース会議も開催した。	今後も児童の家庭環境を注意深く観察し、関係機関に情報提供をしていく。	
研究・研修	研究の組織・計画・実施	研究主題に沿った校内研究を計画的、効果的に進める。	A	授業研究部を中心に、授業力の向上をめざし、授業公開の機会を確保した。また、新学習指導要領に向けてのカリキュラムの作成検討を実施した。	大学教育学部と連携して、効率的、効果的な研究体制を構築する。	
	校内研修の実施	目的に沿った校内研修を実施し、その成果を確実に教育実践の場に生かす。（年1人1回以上実施）	A	保健研修、道徳研修、救急研修、水泳研修等を計画し、それぞれの研修において、最新で現実的な研修内容で実施した。	今後も必要性に応じ、現場ですぐに生かせる実践的な研修を実施していく。	
	校内研究の充実	研究部を中心とした研究とともに、各自の学級経営、教科に関する研究を推進する。	A	A	今年度は「算数」を重点教科とし、校内公開授業を行ったほか、11月の私小連半日研修会で授業実践を公開し研修を積んだ。	より効果的な校内研究の方向性を考察する。
	校外研究会への参加	自主的・積極的に参加した校外研究会の成果を校内で生かす。（年1人2回以上）	A	私立小学校連合会開催の研修会について、全教員が春・秋の最低2回の研修会に参加し研鑽を積んだ。また、夏の全国研修会にも多数参加し、情報交換を進めることができた。特に半日研修会では、本校を会場として算数の公開授業を実施することにより、全教員に貴重な経験となった。	来年度全国研修会、再来年度西日本研修会の地元開催を受け、教員各自が自己研鑽をつむ。	

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
募集活動	広報部、管理職の役割分担	広報部員、管理職がそれぞれ適切な役割分担を行って、効果的な広報活動を展開する。	A	A	安心安全な学校作りをめざして、実践していることを広くアピールするため、特別に11月に外部向け授業見学会を実施、担任の授業を公開し、教育内容を広報した。	より効果的な校内研究の方向性を模索する。効果的な広報活動と、地道な情報活動をすすめる。
	広報部会の開催	広報部会を開催し、広報戦略について議論を深めていく。(複数回実施)	A		広報部会を随時開催し、常に競合校の状況と募集状況を考慮した広報戦略の立案に努めた。	本校の教育活動を広く理解していただくため、説明会や体験授業はじめ、幼稚園、幼児教室訪問などをさらに充実させる。
	ホームページの充実	ホームページでの教育内容紹介、募集行事発信、ニュースアンドトピックスの毎日更新など、ネットによる効果的な広報活動を展開する。	A		保護者、受験者、マスコミ等の受信者を意識して、メンテナンス期間を除き、ほぼ毎日ニュースを発信した。受験情報業者によるホームページのページビュー統計では訪問数、閲覧指数、ページ滞在時間等で昨年より数値が上回った。	広報活動の中心的役割として、魅力ある発信を続け、内容充実させる。
	募集活動の積極的展開	幼児教室・幼稚園の訪問、外部説明会・外部子育て講演会の開催、ダイレクトメールの発送など積極的な募集活動を展開する。募集定員充足を必達する。(入学者数70名以上)	A		11月に外部向け授業見学会を実施、担任の授業を公開し、教育内容を広報した。志願者がやや減少したが、入学定員70名を充足させることはできた。次年度にむけ、さらなる広報活動が必要と考える。	教育講演会を幅広く開催し、志願者の裾野を拡げる努力する。
	入学説明会の充実	全クラス授業公開や児童発表など、本校独自の内容で魅力を発信する。(参加者数延べ150名)	A		入学説明会を3月、6月、続いて8月末に実施した。参加者は昨年度よりやや減少したが、熱心な保護者層を集めることができた。参加者は3回とも120名前後であった。	他校の入試早期実施状況について今後も情報収集して開催時期を検討する。
	体験入学の充実	全8コースの体験授業を用意し、それぞれに高学年児童が付き添う本校独自の内容を展開する。(昨年度以上の参加者数)	A		児童付き添いと独自の体験内容で他校との差別化を図った結果、安心安全な学校を広くアピールすることができた。	子どもが参加して楽しかったと感じるプログラムを今後も検討する。
	「不易流行」の重視	保護者の期待する先進的な教育内容と、普遍的で伝統的な価値観に基づく教育内容の両立を目指した本校の特長を意識して発信する。(HP更新)	A		「情報科」教育や国内留学、社会に開かれた教育課程などの「流行」部分の鮮明化に加え、年間を通じて「不易」教育の重要性もホームページ等を通じてアピールすることができた。	双方のバランスを考えた教育の利点を保護者に訴え続ける。
	近隣競合校との差別化	本校教育の特長について、他校と明確に差別化したメリットとして発信することに努力する。(HP更新)	A		プログラミングや英語教育についての他校の取組が進行中、従来からの体験学習や本校独自の学習形態である「おしらせ学習」の効果について広く広報した。	今後益々差別化を明確にしていく。
	総合学園の魅力の発信	同じキャンパス内に全ての校種が共存し、交流連携していることのメリットを発信する。(HP更新)	A		「T-time」などを通じて、学園連携交流のメリットを学内外に伝えることができた。特に大学との連携交流をホームページや「学校だより」、「校長室だより」などで積極的に発信した。	今後中高との交流連携の場を増やす努力をする。
学校評価	学校評価表の作成	学校評価表の作成にあたって、重点目標に特化し、より現実的な項目になるよう努める。事業計画との連動を実現する。	A	A	評価項目について精査し、令和元年度の反省を生かし、内容を自己点検、自己評価できるものにした。	今年度の反省にたった次年度の改善点を明確化していく。
	学校関係者評価委員会での議論結果の重視	委員会での意見を十分に尊重し、次年度での改善に努めている。総合評価「A」を確保する。(総合評価「A」確保)	A		学校評価表をもとに検討していただき、多面的で忌憚のないご意見をいただいたことを受け、内容を教職員で共有し、今後の教育活動に生かした。	今後も忌憚のないご意見をいただけるように努める。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
学校運営	学園財政状況についての共有化	学園財政の現状について全教職員の共通理解を図る。「財政健全化計画(小学校・幼稚園編)」を全教職員に配付し、徹底を図る。(「財政健全化計画(小学校・幼稚園編)」)	A	学園の財政状況を共通理解し、予算執行の際も、費用対効果を意識して慎重に支出するよう周知徹底した。小学校における財政健全化に対する共通理解を図り予算のスリム化についての職員の理解を得た。また、事務職からの要望により、予算執行期限を厳守するよう伝えた。	学園の財政状況について、情報を開示して的確に説明していく。
	学校各部予算案の立案	財政状況を理解の上、費用対効果をふまえた適正な予算案を作成する(予算案作成)	A	新学習指導要領の実施に向け、最小限必要な補充物品を確認し、予算化した。また、教育環境改善のために特に必要と認められる項目のみ、特別枠で執行した。学校全体として合理的予算案が立案できた。	常に必要な情報を開示して、学園の財政健全化に対する職員の理解を求める。
	経費の節減	節電や材料の節約、有効利用など、経費節減への意識を強化する。	A	職員で経費節減への共通認識をもって臨み、各項目で概ね予算内に納めることができた。	なぜ必要か、どのような価値があるかを徹底して検証する。

評価は4段階【A：十分である(よくできた)、B：ほぼ十分である(できた)、C：あまり十分でない(あまりできなかった)、D：改善を要する(できなかった)】

3. 学校関係者評価

意見	改善方策
<p>○異例の事態が生じた年度であったにもかかわらず、帝塚山小学校の特長を生かす各活動がなされていたと思う。それは、校長先生はじめ教職員の方々の強い結束力があったからこそと、大いに評価できると思う。また、保護者との日頃の連携がそれを強く支えていたといえるのではないだろうか。</p> <p>○その後の対応は校長先生のリーダーシップの下、メンタルな部分も含め児童への細微にわたる配慮をはじめ、先生方が日常の学校生活を取り戻すために一致団結してとりくまれたことは、大いに評価すべきと思う。</p>	<p>○現在のような新型コロナウイルス感染症拡大によって生徒の在宅時間が増えてくると、普段から一人1台の個人用タブレットを活用し、それを通して教職員とのつながりを意識させていくことや、友だちとの関わりも見出していくことが必須になる。ICT環境等の今後の充実が必要である。</p>
<p>○働き方改革の視点から、教科指導だけでなく、特別活動等にかかる教員の学内における勤務時間は限られており、結局、学外での時間に多くの時間を費やして準備・研究等を行っていると思う。その中で指導力を磨いたり、後輩の指導をしたりすることも課されてくる。しかしながら、様々な研修を実施し、前向きに対処されていることは今後も期待したいところである。</p>	<p>○教員の働き方、意識改革を考えていくことと、保護者の教育内容に関する満足度を上げていくことは表裏一体と考えられ、どこでそのバランスを保っていいのか、今後の舵取りが大変重要になってくるので、その舵取りに注力していく。</p>
<p>○教育連携から、幼稚園との連携は頻繁であり、交流という意味だけでなく、より理解を深めていただいていることは素晴らしいと思う。2020年度は大学の教育学部が開設されて2年目となるので、より進展した連携をしていただけると期待する。特にロボット教室に関する大学の新入生の関心は高いように思う。</p>	<p>○教育連携は、まず教職員間の連携であるといわれている。各校種の教育に対する相互理解が深まるような試みを遂行していく。</p> <p>○大学生と小学生、幼稚園児の直接的な交流は非常に有意義で、双方に大きな影響を感じる。今後もより一層進めていく。</p>
<p>○総合評価や内部進学項目でも記されている通り、内部中学への進学率は保護者にとっては大変大きな関心事で、幼稚園から小学校への内部進学希望者の多くは中学への内部進学をも見据えての方が多く、実際の希望者の中での進学率と全体教からの進学率との違いをはっきりと示す必要があるのかなと思う。</p>	<p>○幼稚園を卒園して、小学校、中学校へと内部進学をしていく子ども達の保護者と話をすると、やはり「子は学園の宝」の精神の統一感を求めておられるように思う。子どもや保護者が安心して進学できる環境を提供できるように努める。</p>
<p>○幼稚園所属の一方的な見方ではありますが、常に小学校の活動や事業の展開については気にしながら、けれどもなかなか詳細までは掴み辛く、うわべでの理解にとどまっていますが、このように年度末の評価を通してその内容を理解し、非常にきめ細やかで鍛錬されていることを感じ、素晴らしいと思う。</p>	<p>○学園内各校の教育内容を理解しあうことは大変重要であると考えます。「子は学園の宝」の精神を貫く教育を実践することにより、現在の保護者はもちろんのこと、今後、本学園に子弟を進学させようとする保護者層の信頼を集めることに繋がると考える。そのためにも、学園全体として、一貫性の調整を図ると共に、教職員間での相互理解と交流をより一層深めるように努める。</p>